

1-2-12d国家

「国家」の最終回は、「国民」についてお話しします。

④国民であること

i) アイデンティティとしての国民

現在の国民国家で最も問われているのは「国民であること」です。

生まれつき、日本人である人はいません。

日本人であるかどうかなど、法律が決める、ただのレッテルにすぎません。

でも、、、

日本人の父と台湾人の母をもつ少女が、自分は結局何人なのか、思い悩んでいたのを、私は知っています。

「金（キム）」という名字をもつ少女を「金（キン）」と呼んで傷つけてしまった経験が、私にはあります。

「自分が何国人であるか」は、現代人のアイデンティティを根強く、そして根深く縛っているようです。

II) 特権としての国民

だからでしょうか、「国民であること」は特権化しがちです。

日本で暮らしているのは日本人だけではありません。

多くの外国人も暮らしています。

少子高齢化によって人口が減っていく日本では、社会を支える働き手としても、同じ国に暮らす仲間としても、在留外国人はとても大切なはずです。

にもかかわらず、外国人をどう受け入れるか、十分に議論が進んでいるとはいえません。

劣悪な労働環境、不法滞在者の処遇など、多くの問題が解決されないままです。

そこには、ごまかしようのない外国人差別があります。

日本の法律では、日本で生まれ育ち、日本語しかしゃべれなくとも、両親が外国人の子供は外国人のままです。

それがいわれのない差別を生み出すのは、特別永住者、いわゆる「在日」と呼ばれる人たちに対する一部の日本人の態度を見ても明らかです。

もし、「日本人であること」は偉い、と思っているとしたら、大きな勘違いです。

しかも、その最も面倒くさいところは、そう思っている本人がそれを「愛国心」だと思い込んでいることです。

iii) 移民

このような**自民族中心主義、エスノセントリズム** (ethnocentrism) は、日本だけの問題ではありません。

むしろ、移民政策をとってきた国々でこそ、グローバリゼーションの反動として起こっています。

ただ、こうした国の状況はもっと複雑です。

そもそもが移民の国であるアメリカで、移民の排斥を声高に主張する大統領が誕生しました。

が、その一方で、一部の不法移民は合法化されています。

こうした移民なしでは、アメリカ社会が成り立たないからです。

これまで移民に寛容であったEU。

近年、移民や難民が大量に流入したせいで社会的な不安が高まり、移民の受け入れが規制されるようになりました。

移民たちが自分たちの生活を脅かしている、と主張する政治家や政党が大きな勢力になりました。

フランスでも、現在、不法移民や難民は厳しく排斥されています。

が、その一方で、サッカーの代表選手の顔ぶれには移民出身者が並んでいます。

そこには、もとからの国民も、国籍を取得した移民も、在留を許可されただけの移民も、それすら許されなかつた不法移民もいます。

隣人として移民を受け入れながら、他者として移民を排斥する——こうした複雑な状況が欧米では起こっています。

が、それが人権を蔑ろにし差別を助長しているのなら、「国家」のあり方自体を問い合わせる必要があります。

iv) 国籍

ところで、、、

ラグビー日本代表に多くの外国人が含まれていることは知っていますか。

ラグビーでは、国の代表として、国籍が絶対条件ではなくなっています。

現在、日本では、約30組に1組が国際結婚だそうです。

その子供をハーフと呼ぶのか、ダブルと呼ぶのか、それともミックスと呼ぶのか。

そういえば、活躍するスポーツ選手にこうしたルーツの人が増えていますね。

だんだん、世の中には、国籍にこだわらない方向に向かっているのかもしれません。

が、「無国籍」は根本的に違います。

無国籍とは、どの国家にも属さず、どの国家からも保護されない、ということです。

無国籍のために空港外へ出られず、18年間空港内で暮らした男性の実例もあります。

日本では、家庭内暴力、DV (domestic violence) から逃れるために、女性が子供の出生を届けないケースもあります。

行政が把握するかぎり救済措置はあるようですが、本来日本人であるはずなのに、親の事情で、国家からの正式なサービスも保護も受けられないのは、子供の人権を踏みにじる事態でしょう。

人間であることと国籍は関係ありません。

が、現実問題として、日本を見ても、世界に目を移しても、人権と国籍とは深く結びついているようです。

これから「国民」のあり方を問うことは、社会を運営する人口が減っている日本では、喫緊の問題だといえます。

外国人や移民、無国籍について考えることは、その大きなヒントになるはずです。